# あけぼの保育園



バスを待つあけぼの保育園の子どもたち (昭和31年・神谷定吉撮影)

うが、SBS通りの市商前辺りである。 なか現在のどこであるか分からないであろ ここは、昔の写真を見ただけでは、なか 昔の写真に写っているのは、今も有東に

げながら来るバスが見えたものだった。 高速道路にさえぎられたりで、比較的近い 物がなかったため、四方がよく見渡せたも エンジン音が聞こえ、やがて土ぼこりをあ 登呂遺跡方面も高松方面も見通せない。 のだが、現在は高いビルが増えたり、東名 昔はこの辺りは一面の原っぱで、高い建 車の数も少ないこの頃は、バスの大きな

あるあけぼの保育園に通ってきた大谷の子

どもたちで、昭和三十一年の撮影である。

分からないほどこの辺りの様相は一変して

方面へと続いていた。そう聞かされないと

昔の久能街道はこの先で南に折れ、大谷

# 安西駅





町であった。 時代には茶町一・二丁目だけが茶商の住む も広く知られているところであるが、江戸 一丁目と上桶屋町の交差点)の今昔である。 茶町は文字通り製茶の集散地として、今

昭和三十五年頃の茶町停留所付近(茶町

静岡茶は線路で横浜に運ばれ、横浜港から 輸出されていたが、明治三十二年になると、 近代になり、東海道線が開通してからは、

> に進出、地元の茶商との競争も激化した。 製茶工場を持つヘリヤ商会が移り、最盛期 なったため、 番町にも広がった。北番町には当時最大の 清水港が直接 には五〇〇人もの従業員がいたという。 こうして、 、集散地域 も、茶町から葵町、安西、北 お茶の輸出がのびるにしたが 横浜や神戸の貿易商が静岡市 海外と貿易ができる開港場と

静岡のお茶の町の未来も見てみたい。



独力で本橋を架橋、安水橋と名付けた。こ きた。その翌年、弥勒町の戸長宮崎総五が 倍川の川越しに苦労を強いられた。 れなかった。そのため、昔の旅人はこの安 明治維新をむかえ、明治六年に仮橋がで 江戸時代は幕府の政策で川に橋を架けら

用の側道が設けられた。(海野)

その後、県による架け替え工事が行われ

れが初代の安倍川橋というべき橋であった。

同三十六年四月に完成。大正十二年七月に

丸子方面の今昔 あいかんばし 昭和9年11月、安倍川橋を手越側より見る(写真提供・山梨写真館)

倍川花火大会が開催されるようになり、夏 からがらこの川沿いに避難。犠牲者は河原 は鉄橋となり、安倍川橋と命名された。 の夜の市民の楽しみの目玉となっている。 街は一夜のうちに焼き尽くされ、 で荼毘に付された。この慰霊行事として安 昨今は交通量の増加で、歩行者や自転車 昭和二十年六月、米軍の空襲により、市 人々は命

# 安倍川橋東詰



時代の教科書にもあった)石碑がある。そ

安倍川橋東詰 (昭和34年·海野幸正撮影)

通運だったが、担当者からこの状況を撮影 橋から写した写真である。私の職場は日本 するよう依頼されて撮影した。

横切って通ったものである。(海野)

の土手の近くにあり、五年間、毎日ここを が、今は〝薩摩通り〟となった。 左側に安西から薩摩土手が延びてきていた 新通りに通じ、左側は本通りとなる。その 分離帯は弥勒公園で、その先が旧東海道の 今も健在。中央の老柳は今は無い。中央の の並びには有名な安倍川餅屋「石部屋」が 私の母校静岡商業は、写真の左、安倍川

倍川の義夫」といわれたという(私の小学 旅人の落とした財布を正直に届け出て、「安 写真の右側には、江戸時代、川越人足が

へ救援物資を輸送するトラック群を安倍川 昭和三十四年の伊勢湾台風直後、被災地

# 丸子の松並木



横切って通ったものである。(海野)

安倍川橋東詰 (昭和34年·海野幸正撮影)

橋から写した写真である。私の職場は日本 通運だったが、担当者からこの状況を撮影 するよう依頼されて撮影した。 へ救援物資を輸送するトラック群を安倍川

昭和三十四年の伊勢湾台風直後、被災地

時代の教科書にもあった)石碑がある。そ 旅人の落とした財布を正直に届け出て、「安 倍川の義夫」といわれたという(私の小学 写真の右側には、江戸時代、川越人足が の土手の近くにあり、五年間、毎日ここを が、今は〝薩摩通り〟となった。 私の母校静岡商業は、写真の左、安倍川

左側に安西から薩摩土手が延びてきていた 新通りに通じ、左側は本通りとなる。その 分離帯は弥勒公園で、その先が旧東海道の 今も健在。中央の老柳は今は無い。中央の の並びには有名な安倍川餅屋「石部屋」が

### 呉服町



の四ツ角。ここは市内唯一のスクランブル交差点、

悠々と歩いている。
和の撮影。人々は信号と車にせかされず昔の写真は昭和二十九年十一月の小春日

セイロを何段も重ね、軽業師のごとく片手前さんが自転車二台で配達帰りだろうか。ちょうど昼時で、近くの岩久そば屋の出

ろう。
姿はわが国の生活文化の中でも特異な姿だハンドルで道の直ん中を悠々と通る。この

多く、都会並みのにぎわいである。(海野)を分ける。左右の道は江川町通り。比較的防火道路として拡げられた。広い道路だが、昭和十五年の静岡大火の後、広の交差点は南北には紺屋町と呉服町とこの交差点は南北には紺屋町と呉服町と



### 江川町交差点



車も好き勝手に走れた。

広々とした江川町交差点(昭和28年・海野幸正摄影)

昔の写真は朝の出勤時。職場へ学校へとる。その右隣は電話局。市内一番の広い交合。その右隣は電話局。市内一番の広い交合計である。

かったからだろう。

自転車がせわしく走り抜けた。信号も無く

交通整理のお巡りさんもいないので、人も

望みたいものだ。(海野)

は人と自転車がまだ主役、車も小型で少なえる。建物はほとんど二階建てで低く、道今よりもずっと空が大きく道幅も広く見

昭和二十八年に撮影した江川町交差点の

が、静岡市らしさのある統一された景観をな屋根。四角なビルばかりの今の街並みだ郵便局の屋根は今は見られないユニーク



昔対比である。 お上が決めたことなどを町民に公示するた 札の辻という名前は、江戸時代、ここに

かったからである。

ダル踏む足も軽やかに見える。(海野)

お母さん方は、買い物帰りか七ブラか、ペ

昔の写真は、晩秋の昼下がり。自転車の

町奉行所(現在の市役所の所)にも近



面の東京堂書店は近年廃業した。本当に懐 かしい昔の構えであった。

市内一番の繁華街の四ツ角、札の辻の今

この角を左へ行けば県庁前、真っ直ぐは 服町、紺屋町を経て静岡駅。右に折れれ 七間町から人宿町、駒形通りだ。

市役所前



明治の頃からのままですよ」明治の頃からのままですよ」明治の頃からのままですよ」の見いという。今はなくなったが、お市内を監視していた。今はなくなったが、が市内を監視していた。今はなくなったが、あっても、周囲はこれより高い建物ばかりで用を足さぬはず。

した。今思えば冒険と思われようが、のど具合に向かってくる自転車数台をキャッチ道のど真ん中にペタリと座り込み、うまいところで、この写真を撮影をした時は、

「この道こんなに広かったかな?

いメインストリートの光景だ。(海野)自転車をひく青年、いかにも昔の静岡らし名さのなかパラソルが光る二人乗り、空かなあの日あの時があった。



# あけぼの保育園



バスを待つあけぼの保育園の子どもたち (昭和31年・神谷定吉撮影)

うが、SBS通りの市商前辺りである。 なか現在のどこであるか分からないであろ ここは、昔の写真を見ただけでは、なか 昔の写真に写っているのは、今も有東に

げながら来るバスが見えたものだった。 高速道路にさえぎられたりで、比較的近い 物がなかったため、四方がよく見渡せたも エンジン音が聞こえ、やがて土ぼこりをあ 登呂遺跡方面も高松方面も見通せない。 のだが、現在は高いビルが増えたり、東名 昔はこの辺りは一面の原っぱで、高い建 車の数も少ないこの頃は、バスの大きな

あるあけぼの保育園に通ってきた大谷の子

どもたちで、昭和三十一年の撮影である。

分からないほどこの辺りの様相は一変して

方面へと続いていた。そう聞かされないと

昔の久能街道はこの先で南に折れ、大谷



が大崩海岸だ。この辺りは太平洋に面した 在の同所との対比である。 静岡市石部から焼津市浜当目までの海岸

昭和三十四年に撮影された大崩海岸と現

われている。 た断崖を形成し、「東海の親知らず」ともい 太平洋

山裾が波に洗われる所で、険しく切り立っ

の荒波が眼下の岸壁に白く砕ける様、 この峠からの眺めは素晴らしく、

四

0

海原に浮かぶ漁船、群れ飛ぶ海鳥、はるか きることがない。西に目を転ずれば、焼津 にかすむ伊豆半島の山並みと、見ていて飽

が一望の絶景である。の港があり、その先には御前崎の半島が見 写真の海上に突き出した迂回路は、 大崩の海岸はあまり変化はないが、 七年七月に造られたものである。 現在 昭和



昭和34年の大崩海岸(写真提供・山梨写真館)

#### 茶町停留所



町であった。<br/>
二丁目と上桶屋町の交差点)の今昔である。<br/>
二丁目と上桶屋町の交差点)の今昔である。

昭和三十五年頃の茶町停留所付近(茶町

輸出されていたが、明治三十二年になると、静岡茶は線路で横浜に運ばれ、横浜港から近代になり、東海道線が開通してからは、

清水港が直接海外と貿易ができる開港場とに進出、地元の茶商との競争も激化した。こうして、お茶の輸出がのびるにしたがい、集散地域も、茶町から葵町、安西、北製茶工場を持つヘリヤ商会が移り、最盛期製茶工場を持つヘリヤ商会が移り、最盛期には五〇〇人もの従業員がいたという。には五〇〇人もの従業員がいたという。



堀をボートで一周することができた。 ある所は静岡刑務所、その手前は、 営のボートハウスで、 による日米文化センターの白亜の洒落た建 道場であったが焼失し、 十年の空襲以前は武徳殿があり、 合福祉会館辺りである。その写真の煙突が 昔の写真ページの、 左の写真は現在県総 右の写真が田中屋経 戦後、 進駐軍指導 柔剣道の 昭和二

今では想像できないが、昔は駿府城の内 足の わ があり、 なった。 戦後は静大付属小・中学校と またこの右並びには静岡師範

エンジョイに利用してみたらと思う。(海野) この駿府城の堀は市民憩いの貴重な水面な 話は聞かない。 が街の水は豊富で冬の渇水期でも水不 せっかくのこの水面を市民の生活の なのに街中に川は無い。







写真と現在との比較である。 られている「丁子屋」前で、昭和三十年の (一六九一) に門人の乙州に贈った句「梅若 写真は、とろろ汁店の中でもよく名が知 とろろ汁については、芭蕉が元禄四年

に、三百年もの歴史を誇る名物である。 菜丸子の宿のとろろ汁」からもわかるよう

理り也……」とある。

東海道丸子の宿は駿府まで一里半、名物 色も香もうるわしく、梅若葉に並べたるも 苔も近浦よりかづき、上たるとおぼしくて、 の名産と見えて、 かなる物ぞと取よせてみれば、山芋は此 層があり、それにより色の白い自然薯が れ、それが名物になったはじめだという。 丸子付近の山あいには蛇絞岩が風化した 「東行話説」には、「名におうとろろ汁は、 いかにも色白く、青海



宝台場と東海道本線



となった同五十四年まで、人々に親しまれ あったため宝台橋と呼ばれた。 た跨線橋であった。洛森も近くに宝音院が 化のため、昭和十一年に完成。線路が高架 開かずの路切対策など市内南北の交通円滑 れる格好になっているが、この宝台橋は

この橋は昭和十五年の大火を同二十年の

道本線によって、街が北部と南部に分断さ 静岡市は、その中心部を東西に貰く東海 である。 思い出がよみがえってくる思い出の多い橋 あろう。SLの煙の臭いとともに、数々の 下ろしながら、何度も何度も渡ったことで

宝台橋の正影を残すものは何も無い。〈海野〉 現在の言語には、人きなピルが立ち並び



宝台橋と東海道本線(昭和47年・海野幸正撮影)

告さんも、街の灯りと下を行く列車を見 災もくぐりぬけた橋である。